生命のリズム

千谷七郎

去る十月二日と五日に行なわれた伊勢神宮の内宮の遷宮の秘儀の折、私には七年前ギリシァを数日の間訪れた時の感慨が蘇(よみがえ)って来た。

夏の暑い盛りであったが、空には連日一片の雲もなかった。ホーマーの舞台となったミュケーネのアガメン王の古跡はさりながら、アクロポリスの丘に立つパルテノン、抜けるような紺青の空と波一つなくすき通った海に包まれ、夕日に浮かぶ岬シュニオンの海神ポセイドン神殿、白銀色に輝くパルナソスの懸崖を屏風にして、やがてなだらかな広漠たる麓高原に移ろうとする山腹に、脚下遠くの彼方にイテア湾の水平線を望見するデルフィのアポロの神域、そしてそこに残るオリーブの森に囲まれた半円劇場の遺跡に立てば、ソクラテス其の他ソフィストたち小理窟屋の輩出時代をはるかに越えて、人の心を遠い、神々すら運命の前にひれ伏した神話時代に運んで、この澄み切って明るいギリシァの地にありながら、不思議と幽愁の気に包むものがあった。その時、十数人の観光客の一団の中のただ一人の日本人であった私は、ふとわれに帰って見れば、いつの間にか胸に伊勢神宮の影をいだいて東西を比較しながら、古代人の心に浸っていた。

確かにここギリシァの聖地は、風土と人間の心とが真に一体となって、人々は万象を悉(ことごと)く生命と感じて、神々を擬人化することなど始めていなかった太古の気を今なおただよわせ、実にすばらしい。がしかし、今はやはり廃墟だ、という思いを禁じえなかった。そう思うと、途中のバスで横切ったミソロンギーの野、一八二四年四月十九日ギリシァ独立戦争にはせ参じた詩人バイロンが散華したあの古戦場の荒涼も、何か寂莫を添えるものになった。あの時老ゲーテがジェノアから一青年に托されて届いたバイロン

の手紙からその意図に気がついて、時を移さず一聯の詩に托して壮図を引き止めようとしたが、遂に若者の血気には及ばなかった。それにしてもバイロンをして生命を捧げしめたこのギリシァがどうして亡びたのであろうか。思いは遠く歴史の跡をたどろうとしたが、そのときそれらを掻き消してせきを切るかのようにこみ上げて来たのは、シラーの哲学詩「ギリシァの神々」であった。

かの花、悉く散り果てぬ
すさまじき朔風に払はれて、
万(よろず)の中の一つ神を肥(こ)えしむと
この世の神々枯れ朽ちつ。

だが、花を塵埃に踏みにじって、わが身が肥えたと思い込んだこの唯一神とは、ヨーロッパのある宗教の唯一最高神もさりながら、所詮は計算を知った独立意志の担い手である人間であることを思えば、神々の去ったのも他人事とは思われず、慄然とする襟元に新しく、今なお生きつづけている伊勢神宮の東風が大地のかおりを運ぶのか、何か全身に不思議な力がしみわたるのを覚えた。それはただ異境に遊ぶ孤客の感傷であったとは、今日も思わない。一行の外人客の誰がこのような思いをもっただろうか。

それから二年後の中秋、私は向うでお世話になったスイスの老神経学者を日本に迎えたとき伊勢神宮に案内した。五十鈴川の岸辺に立った彼は一言二言ぽつりと語った。「今日ではヨーロッパから日本まで二日あれば足りる。一日ここ伊勢神宮を訪れて帰ればよい。現代ヨーロッパ人にとって最高の精神療法が与えられるだろう」それに加えて、「この神宮が無くなるとき、それは日本民族の亡びるときだろう」とも言った。彼も私がかつてギリシァで感じたのと同じ感慨にひき込まれたものと思う。一時間有余の参詣の間、時折りの嘆声のほかほとんど口をきかなかった彼が帰国後に著した『日本の印象』の中で、伊勢を語る数ページは最も精彩を放っている個所である。

さて、遷宮は灯を消して夜の暗闇に運ばれる秘儀で、二十年毎に更新されるという。私は神道の門外漢であるけれども、この暗闇と二十年の更新との二つに、生命の神秘の最高の象徴を見る。

胎児は子宮の暗闇の中で、目も見えず、耳も聞こえず、要するに五感の中で、むろん意識もなくて、あの不思議な発育を経て生まれ出る。明るく、意識のあるところではこの生の神秘は行なわれない。この暗闇は他の何ものにもたとえられないだろう。人間の意識を越えた暗闇の神秘というよりない。詩人のみがわずかにそれを示唆しうるだけであろう。月のない旧暦三十日の闇に外宮に詣でた芭蕉の一句

みそか月なし千とせの杉を抱(だく)あらし

は、本当に人の「深き心」を引き起こす。

ところで子宮内でたどる胎児の道も、その親またその親たちが

いつの昔からか経てきた過程の繰り返しである。このように、類似のことが類似の期間に繰り返されることをリズムという。遷宮という二十年毎の更新は人類の世代交代のリズムを端的に示すからこそ、私どもを常に生命の神秘に誘う。そこでもう少し精密に生命のリズムを考えて見たい。

人間や多くの動物に見られる睡眠と覚醒との交替は昼夜の交替と一致するが、人間より遙かに下層で生をいとなみつづける植物界の生のメロディーも、この昼夜のリズムに従う。昼夜のリズムと言えば、言うまでもなく太陽を周って黄道を運行する地球の自転リズムの現われである。そして植物だけが成長、開花、結果という四季の輪航について行くのではなく、人間もそうである。身長や胸囲増大の進行期と退行期、睡眠の持続と深さとの年内リズム、気分変動の季節的リズムなども見られる。大まかな統計によれば妊娠と風俗犯罪と自殺とが同じ季節的変動を示す。爬虫類や両棲類の脱皮、鳥類の換毛、哺乳動物の毛替り、渡り鳥の長距離飛翔、各種のいわゆる冬眠、発情期と妊娠期と出産期、鮭や鰻や鯡の移住、蜻蛉や蝶の巣立ちの時期、それらすべてや、その他無数の多くが宇宙のリズムにはめこまれているのが見られる。そして太陽のリズムに月のリズムが交錯する。このことによって太古の知恵や、今日多くの未開民族にも見いだされる信仰の真実性が幾つかの点で確かめられている。たとえば、満月直前に伐採された樹木は、新月直前に伐採されたものよりも樹液が多過ぎて腐れやすいということもあるという。さらに月リズムとの関係で科学的に証明された海棲下等動物の有名な例なども少なくない。

このようにリズムの偉大な交響楽を思い、たどる人であれば、個体生命の推移と宇宙的推移とが一つのリズム的全体の中で、対極的に相応している諸形態であると見なければならぬと、やがて感じるようになるだろう。したがって、この一つのリズム的全体は、たとい無機的であるとは言え、生きていることになる。ともかくも私どもの住む地球は不断の搏動を示している。雪解けのリズム的時期、河川の水量増減の季節的リズム、地下水の深さの周期的変動、気圧や気温、湿度や電気伝導度などの日周期、地磁気の偏角や伏角の日、年、および百年の周期、極光・月、半年、および一年の周期、無風帯の周期的変動など思い浮かべて見られるといい。さらに砂漠に見られる三日月砂丘、砂丘の風紋、鱗雲、山や山脈の波状などの形態に見られるリズムも見られよう。

このように人間、動物、植物の諸生命、それに無機的な自然界のすべてを含めて、「一つ息吹き、一つ流れにものみな感じ合う」ことが知られてくるだろう。さらに生殖というのは、たとえば人間なら人間という属の形態（物質、おもかげ）が世代から世代へと、類似の形象が類似の期間内に繰り返されるリズム的推移であることに着目するなら、どんなにリズムが生命の根源現象である

かが証明されるだろう。そしてリズムは去ると来るとの、すなわち去来の交替にあるから、同じことは二度と来ない。ただ類似の現象が類似の期間をおいて交替的に去来するのみである。

さて、現実というのは生起する現象であるから、現象の空間性は不断に変移せざるをえない。したがって、生きている、と前に述べた宇宙の中では、空間と時間とは、ちょうど肉体と心の関係になる。肉体は心の現象であり、心は肉体の意（こころ）であるから、現実空間は現実時間の現象であり、時間は空間の心ということになる。しかし心の現われはすべてリズム的推移を示すから、リズムの本質を解く鍵であると前に述べた去来の交替は、時間自身に固有するものということになるだろう。したがってリズムの意味の根拠は、ただ物尺、直線的分秒しか知らない物理学者には神話的に響くかも知れないけれど、現実時間の脈うつ歩みにあると言えるだろう。したがって個体の心は、それがリズムとして羽ばたくとき、どんなに短い刹那であろうとも、生起の両極である空間と時間とを結ぶそのもの、すなわち、生成と消滅との永遠性そのものである。李白はこのことを詠う。

天地者万物之逆旅（げきりょ）
光陰者百代之過客

天地は万物の宿る宿屋であって、たちまちに過ぎて行く、天地は森羅万象の現象空間である。また光陰（時間）は永遠に休むことなくこの天地を過ぎて行く旅人である。万物が旅人の姿であれば、旅人は万物の心である。

芭蕉が奥の細道の冒頭に引いて「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」と言いかえているが、李白の前句の影がやや薄れて、時の無常性の側面がより大きく強調されているのは、捨身無常に行脚する詩人にふさわしい。

さもあれ、この生命のリズムの充実こそ、人間形成の根源、したがって生き甲斐の根差すところであり、このリズムの破壊が人間の意志のあせりであることに十分思いをいたさなくてはならないであろう。母性本能は最も安んじで預けられる手綱である。

蓬莱に聞かばや伊勢の初太鼓　芭蕉

＊　＊

（東京女子医科大学）